

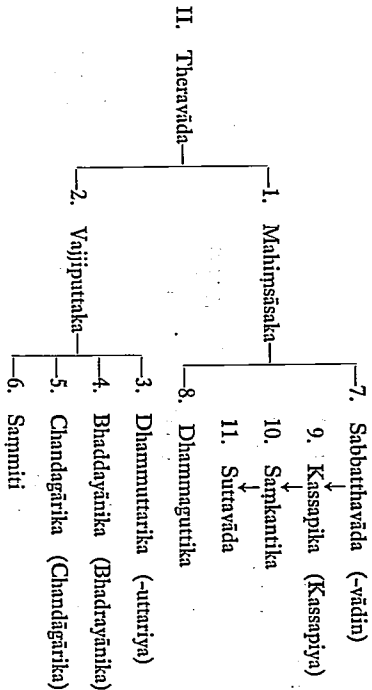
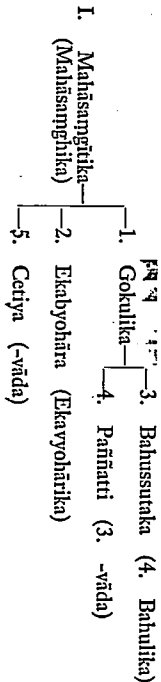
部派の成立

塚 本 啓 祥

一、分派の系譜

分派の系譜を示す伝承は十数種に及び、部派の立場によつてかなりの相違が認められる。まず、南北両伝における代表的な伝承を表示すれば、次の如くである。

(1) *Dīghanīsa*, v. 39-54 [A.D. IV]; *Mahāvīsa*, v. 1-13 [A.D. VI]; *Mahābhaddhīsa*, pp. 96f. [A.D. X] (分別説部＝スリランカー上座部の大寺派の伝承)
※部派の名称と順序は *Dī.* に拠り、*Mah.* と相違する箇所は () の中に示した。



(a) その後の Jambudīpa における分派

1. Hemavatika (Hemavata)
2. Rājagṛika (Rājagiriya)
3. Siddhāttha
4. Pubbaselika (-seliya)
5. Aparasēlika (-seliya)
6. Apararājagṛika (Vajiriyā)

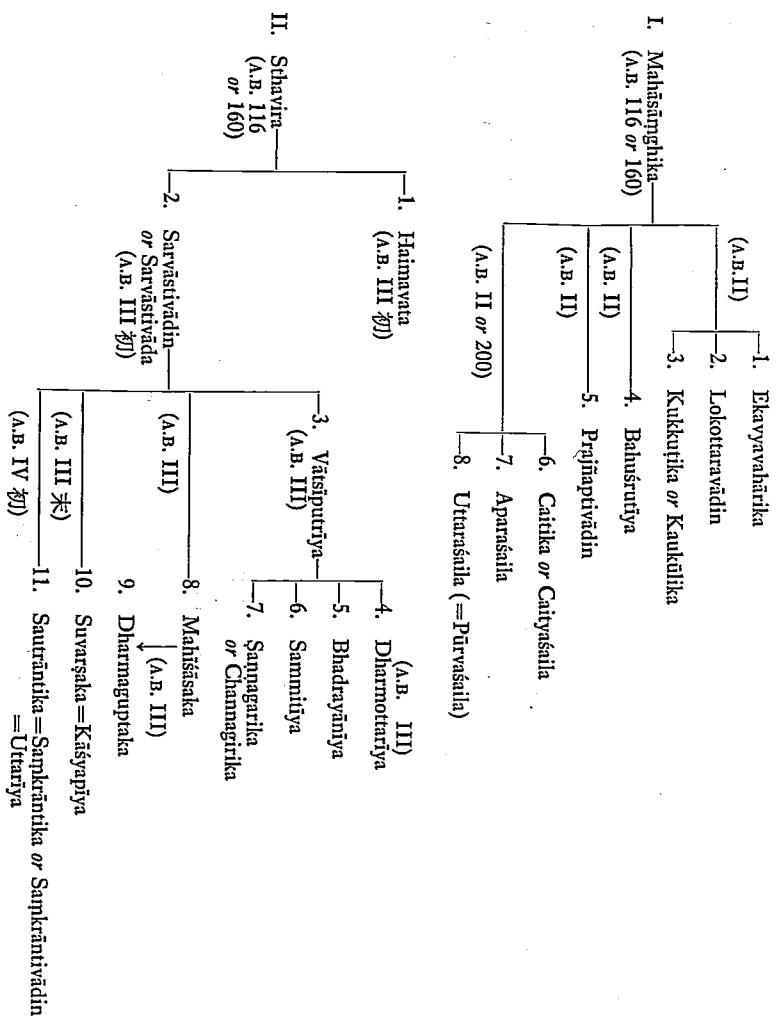
(g) Laṅkāḍḍipa における分派

1. (Dhammaruci)
2. (Sagaliya)

(2) *Samyabhedoparacanakkara* (by Vasumitra, A.D. II); 『十八部論』 No. 2032 [A.D. 401-413 鳩摩羅什集] 大正四九・一七中

一上。『部執異論』 No. 2033 [A.D. 548-569 真諦訳] 大正四九・二〇上—中。『異部宗輪論』 No. 2031 [A.D. 662 玄奘訳] 大正四九・一五上—中。『チベント訳』 [A.D. IX, Dharmakara, Bhaiṣkyon 共訳] 大谷 No. 5639; 東北 No. 4138 (説一切有部の伝承)

※部派名の遷梵は『部執異論付記』大正四九・二二中—下に拠る。A.B. は仏滅後を表す。



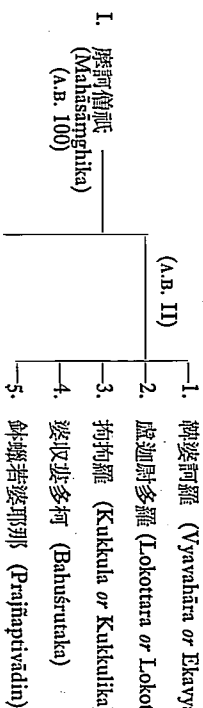
右の二表において、大衆系の部派の名称についてはお

よその一致をみるが、スリランカーの伝承がアンドラ地方の部派（東山部、西山部など）の所属の系統を伝えないのは、その派が早くスリランカーに伝わって、インド本土の正確な情報をえられなかったためであろう。次に上座系の分派の系譜は両伝承において相違が認められる。スリランカーの伝承は、上座系のすべての部派を Theravāda（スリランカ上座部）より流出せしめるのに対して、カシミール有部の伝承は、Śāhaviya（上座部）より雪山部と説一切有部を分立し、それ以外の上座系の部派を後者より流出せしめる。しかし、雪山部は先上座（本上座）部とも名づけられるのであるから、雪山部を上座系の本派に比定すれば、両派の伝承が、上座系の諸派を自派より流出

したと主張する点では共通している。

さて、上座部より分立する二大部派は、スリランカー伝承によれば化地部と犢子部であるが（説一切有部は化地部より流出）、カシミール有部の伝承は、説一切有部から同じ二大部派を分立せしめる（スリランカー上座部を無視）。かように、化地部と犢子部との分立の形態は共通しているが、説一切有部とスリランカー上座部との位置付けに相違が認められる。これは両派がある時期に対立関係にあったことを推定せしめる。従って、他派の伝承を表示しよう。

(3) 『舍利弗問經』No. 1465 [A.B. 317-420 失訳] 大正二四・九
○○中一ト（大衆部の伝承）



① Ekavyavahārika, Gokūlika, Bahusrūya, Prajñaptivādin, Catika (大衆部の支派)

② Dharmottariya, Bhadrāyāniya, Sammatīya, Sammagarika (犍子部の支派)

のグループの流出の形態は、スリランカー上座部の伝承に一致する。しかし、説一切有部から流出する部派の系譜は、『舍利弗問経』のそれに近い関係にある。また、正量部伝承が、有部と化地部の中間に分別説部を挿入することは注目に価する。⁽⁴⁾

二、部派の形成と展開⁽⁵⁾

1、大衆系の部派

① Mahāsaṃghika (Pāli: Mahāsaṃghika, Mahāsaṃghika, 摩訶僧祇、摩訶僧耆柯、大衆; Dge hdun phal chen poli sde) 根本分裂の頃(仏滅後二世紀, B.C. IV世紀-II世紀)大衆部がマガダを中心とした地域を拠点としたことは、第二結集や根本分裂の伝説から推定するに難くない。⁽⁶⁾ 前二後二世紀には Mathurā において、また二世紀には Kauśāmbi, Wardak, Karle にその僧伽が存在した。⁽⁷⁾ 三世紀には アンド

ラ地方の Amarāvati, Nāgarjunakoṇḍa と Hāmgha (= [Mahā]-saṃghika) の名称によって、その存在が確認されている。⁽⁸⁾ 玄奘によれば、大衆部の中心として、安咀羅縛国 (Andar-ab, Hindukush)⁽⁹⁾ 迦湿弥羅国 (Kāśmīra)⁽¹⁰⁾ 南インドの駄那羯磔迦国 (Dhanyakakata) を挙げている。義浄によれば、大衆部はマガダに存在し、南インド、北インド、西インド (羅茶 Lāta, 信度 Sindh) では僅かに存在した。東裔 (Nālanda 以東) では、上座・有部・正量の諸部と共に雑行された。スリランカーでは全く見出されず、南海諸洲では上座部と兼学された。

② Ekavyavahārika (Pāli: Ekavyokāra, Ekavyoharika; 猗柯毗与婆訶利柯、一説、執一語言; T'ha śhād gcig pa; Vyavahāra (韓婆訶羅)

仏滅後二世紀、大衆部より分派した最初のグループ(説出世・鶏胤を含む)中の一派である。バヴァヤの大衆部伝承はこの派の存在を知らない。またヴィニターデーヴァ⁽¹¹⁾(根本有部の伝承)はこのグループの存在を伝えない。真諦⁽¹²⁾によれば、大衆部が王舎城の北、央掘多羅国 (Anguta-rāpa) に伝播し、異諍を生じたと伝える。一説部とは、こ

の派は、世・出世の法は悉く是れ仮名であると執し、一切法は実体あること無し、と主張する。同じくこれは一名であり、名は説であるから、一説と名づける、と釈している。『文殊師利問経』⁽¹³⁾に「執一語言部」となし、所執が「摩訶」僧祇と同じであるから一と言う、と論じているが、⁽¹⁴⁾窺基は正しくないと反論する。

③ Lokottaravādin (盧俱多羅婆提、出世間説、出世説、説出世、出世間語言; Hjiḡ rten hidas smra, Hjiḡ rten las hidas par smra ba); Lokottara (盧迦尉多羅)

仏滅後二世紀、大衆部より分立した最初のグループ中の一派である。スリランカー上座部とバヴァヤの正量部と大衆部の伝承とは、この派の存在を知らない。⁽¹⁵⁾窺基によれば、この派は世間の煩惱は顛倒より起こり、これが業を生じ、業より果を生ずる、と主張する。世間の法はすでに顛倒より生じ、顛倒にして実でないから、世間の法は但だ仮名のみ有って、すべて実体がない。出世の法は顛倒より起こることなく、道と道果は皆実有である。これは実であり、世間は皆仮である。したがって説出世部と名づける、と釈している。⁽¹⁶⁾パローによれば、説出世部

は鶏胤部から分立した後に、大衆部の名称を帯びた一説部に、比定される。玄奘⁽¹⁷⁾は梵衍那国 (Bharṇanā) にこの派が存在したことを伝える。ターラナータ⁽¹⁸⁾はパーラ王朝期(九一〇世紀)にこの派が存在したことに言及している。

現存の Mahāvastu は、説出世部の律蔵に付せられたアヴァダーナ(仏伝)であったと推定される。⁽¹⁹⁾ダットによれば、同書において catiya (塔廟)の供養業に大果を認めるところから、説出世部を制多山部に比定する。

④ Gokūlika (Pāli: Ba lan gnaṣ pa); Kūkūla (拘拘羅)、Kūkūlika (高拘梨・高拘梨柯、灰山住); Kūkūlika (高俱胝柯、灰山住; Bṛa eṣṣ ris)

仏滅後二世紀、大衆部より分派した最初のグループ中の一派である。部派名の語原に三種の説がある。スリランカー上座部と、バヴァヤの正量部と大衆部との伝承は Gokūlika を伝える。牡牛 (Go) の家系 (kula) に属するものを意味する。『舍利弗問経』『文殊師利問経』および『部執異論』は Kūkūlika (灰山住部) を伝える。Kūkūla は「熱灰」を意味し、真諦⁽²¹⁾によれば、この部の住する山の

石は灰を作るので、灰山住部と名づける。『異部宗輪論』は Kukkuṭa (鶏胤部) を伝える。Kukkuṭa は「雄鶏」を意味し、⁽²²⁾ 窺基によれば、これはバラモンの姓である。上古に仙あつて、食欲に逼られて遂に一鶏に染して生むところの族であるので鶏胤という。この派は、経と律を方便となして、対法 (アビダルマ) のみを弘めた。

⑤ Bahusūnaka (Pāli: Bahussūnaka, Bahulika; 婆収婁多柯、婆吼輪底柯、多聞、得多聞; Main du tiros pa) or Bahusūnaka

スリランカー上座部とバヴァの正量部伝承は、牛家部から多聞部を流出せしめるが、ヴァスミトラと『舍利弗問經』の伝承は、仏滅後二世紀に大衆系の第二のグループ中の一派として大衆部から直接に分立せしめる。⁽²³⁾ また、ヴィニタデーヴァは有部より分派したとなし、バヴァの大衆部伝承はこの派の存在を知らない。

真諦によれば、仏在世の時にバラモンがいて祠皮衣 (Yajñavalkya) と名づけた。昔仙人となつて樹皮衣を被て天を祠つたので、後に出家して、仏の説法に随つて能く誦持した。仏が未だ涅槃しない時、雪山に住して、坐禪

して仏の滅度を知らなかった。仏滅後二百年中に、雪山より出でて央掘多羅國に至った。大衆部所伝の三藏は淺義であつたので、彼は具足せる深義を誦した。大衆部の中には、淺義を弘める者と、深義を弘める者があつた。深義を弘める者は大衆部より分立して多聞部と名づけた、と伝えている。また『成実論』(No. 1616, A.D. 424-412) をこの派に帰している。⁽²⁴⁾

三世紀に南インドの Nāgajunakonda (三世紀) と西北インドの Pāṭali Dhuri (五世紀) に、この派の存在が確証される。⁽²⁵⁾ これは大衆部の二大中心地、ガンダーラとアンドラにおいて、前者は大衆部の第一のグループ(一説・説出世)と、後者は第三のグループ(制多山派の支派、アンダカ派)と接触したことを推定せしめる。また、同派が有部との交渉をもつた可能性は、ヴァスミトラが有部の教義との親縁關係を示し、ヴィニタデーヴァが同派を有部のグループの第五の分派として伝えることがその根拠を与える。

⑥ Prajāpativādin (Pāli: Pāṇṇati, Pāṇṇativāda; 鉢蟻若婆耶那、波羅若底婆拖、施設〔論〕、分別説、説仮、Bhags

par smra ba)

スリランカー上座部とバヴァの正量部伝承は、牛家部から多聞部と共に流出せしめるが、有部と『舍利弗問經』の伝承は、仏滅後二世紀に大衆系の第二のグループ中の一派として分立したと伝える。『文殊師利問經』とバヴァの大衆部伝承はこの派の存在を知らない。

真諦によれば、仏在世の時に大迦旃延が論を作つて分別解説した。滅後二百年に大迦旃延は阿耨達池よりマガダに至り、大衆部の中で三藏聖教を、これは仏の仮名の説、真実の説、真諦、俗諦、因果であると分別した。大衆部の中で彼の所説を信受する者があつて、一部を成じた。これを分別説部と名づける。分別説部は大迦旃延の弟子であり、前の多聞部は所聞が先の所聞を過ぐるので多聞部と称する。今の分別部はまた先の所聞を分別する。更に広く聞くのではない、と伝えている。

窺基によれば、この派の説く世・出世の法の中に部分的な仮〔説〕がある。これは一向仮ではないので一説部と異なる。出世の法は一切が皆実であるのではないから説出世部と異なる。すでに世法に仮があり、出世の法に実

があると主張し、その所立によつて部派の名を称した。真諦はこの派を分別説部と言う、と釈している。

⑦ Mahādevaka (摩訶提婆、大天; Lha chen po); Caitika, Caitya (Pāli: Cetiya, Cetiyaṇḍa; 質多羅 Cetiṇa、遊迦、支提迦、只底迦; Mchod rten pa); Cetiyaśāla (支底与世羅、支提山、制多山)

アンドラ地方の南方大衆部が、大天を派祖とする制多山部に由来することは、南北両伝の一致するところであるが、それより派生した諸派については、伝承相互間に相違が認められる。北伝によれば、北山(末多利)部・東山部・西山部を伝え、伝承に混乱が認められるのに対して、スリランカー上座部は Pubbaseliya, Aparaseliya, Rājagiriya, Siddhantika 等を、インドにおける後期の分派として伝えている。また、バヴァの大衆部伝承は、南伝と同じ源泉に基づく。

制多山部の流出の母体については、バヴァの正量部伝承のみが Baṭṭa gnaṇa pa (Gokulika) とする以外は、すべての伝承は大衆部に帰している。有部の伝承は、仏滅後二世紀末、その派祖大天が支提山(制多山 Cetiyaśāla, Mchod

ten gyi ri) に住したところから支提迦 (Caitika > Caitya +
ika; Caitya > Caitya + iya) または制多山部 (Caitya-saia) と名
づけ、『舍利弗問經』が摩訶提婆部 (Mahadevaka) を伝え
るのは、派祖の名に由来する (仏滅後三世紀)。

制多山部は、西暦二世紀には Amarāvati に存在し⁽²⁸⁾
cetiya-vandaka/cetiya-vadaka (制多の崇拜者) または Rāja-
giri-vāsika (王山の居住者) と称せられた。これらによ
って、Amarāvati 仏塔の周辺 (首都 Dharmakota の東一マイル)
には、かつて cetiyagiri によって呼ばれ、そこを拠点とし
た部派が制多山部であり、その最盛期は二世紀であった
ことが知られる。また同仏塔に、Mahāvīnaseliya (Mahā-
nāsāla 大林堂 or Mahāvāsāla 大林山に居住する者; i-hi が関
係をもっている。また、制多山部の一派が西インドの
Nāsi, Jumar に居住したことも知られる⁽²⁹⁾。

⑧ Uṭṭariya (末多利-n-Uṭṭariya), Uṭṭarāsāla 鬱多羅施羅、
鬱多羅世羅、北山、北山住; Bhan-gi-ri bo) or Pūrasāla
(Pūti: Pubbaseliya, Pubbaseliya; 仏婆羅、東山; Sar-gi-ri
bo)
初期の伝承たる『舍利弗問經』とヴァスミトラのみが

北山部を伝え、ついで『十八部論』『文殊師利問經』が
北山部・東山部を併記し、それに代って後期伝承たるス
リランカー上座部、バウヤの上座部と大衆部の伝承が東
山部を伝えるのは、伝承の過程における部派名の転用
(北山部→北山・東山部→東山部) を推定せしめる。

前二〇〇年頃の Bhāṭṭipola (キストナー地方) 塔出土の
銘文に、沙門 Uṭṭara による寄進が知られる。もしこれを
『舍利弗問經』の末多利部 (n-Uṭṭariya) に比定しているなら
ば、Bhāṭṭipola 塔に関係をもった Uṭṭara の部派 (Uṭṭariya
> Uṭṭara + iya) が存在し、それが Amarāvati 塔の近く (東南
方クリシュナー河口) に位置したところから、後世になっ
て Uṭṭara を方角の意味に誤認して、北山部と称したと推
定されよう⁽³⁴⁾。

さて、東山部はアンドラ地方の Dharmakota と Allura
に存在した⁽³⁵⁾。また、三世紀の Nāgārjunakonda 制多堂銘文⁽³⁶⁾
には東山 (Purasala) が地名として現われる。これらの記
述から、Amarāvati とその周辺に根拠地をもつ部派が東
山部であり、かれらは Mahāvīnaseliya と名づけられた
が、また相應部經典を伝持したごとく (Samyutta-nikāya 相

應部經典の暗誦者) も知られる⁽³⁷⁾。

⑨ Aparāsāla (Pūti: Aparaseliya, Aparaseliya; 阿羅說、西
山住; Nub-kyi-ri bo)
この派の存在は、『舍利弗問經』『部執異論』『文殊師

利問經』およびバウヤの正量部伝承には知られない。
三世紀の Nāgārjunakonda 大塔石柱銘文等によれば、石

柱等の付帯施設が Aparamahāvīnaseliya (西方の Mahāvī-
nāsāla) の所領として寄進されたことを銘刻する。J. Vogel
は Amarāvati の Mahāvīnaseliya に対して、西方のそれで
あることを指摘している⁽³⁸⁾。

バウヤの上座部伝承によれば、制多をもつ山に居住す
る者 (method rten can gyi ri la gnas bcas pa) を制多部と
言い、東の山と西の山に居住すべき者を東山部・西山部
と呼んでいる。玄奘は、駄那羯磔迦 (Dhanakakata or
Dhanyakakata) の都城を基準として、Amarāvati と Dhar-
mākota の僧伽藍を東山 (弗婆勢羅 Pūrasāla) および西山
(阿伐羅勢羅 Aparāsāla) と名づけている。しかし、西山

部の名称は、Ghanasāla⁽³⁹⁾ の他、西海部の Kanheri と
Dhenukāta の居住者によつて、西山部の特殊な財産と

して窟院等が寄進されたことを銘刻している⁽⁴³⁾。これは、
Dhenukāta (Dhanyakakata) はシャータヴァーハナ王朝
の首都であったが、イクシユヴァーク王朝が Nāgārju-
nāda に都した頃には、かれらが Dhenukāta から西イ
ンドへ移動したことを推定せしめる。

Amarāvati の Mahāvīnaseliya に対して、新しいかれらの
拠点 Nāgārjunakonda の居住者は Aparamahāvīnaseliya と
呼ばれたが、その派が隆盛をきわめた段階で、前者は後
者から区別されて Pūraseliya (東山部) と呼ばれたよう
である。これは西山部の名称が碑文において明確さを欠
く点からも推定しうる。しかし、仏教の中心地の西方へ
の移動が過去の事実となった時、文献には西山部が明確
に伝承され、これに反してかつての中心地 Amarāvati が、
東山部または北山部として混乱して伝承されたものと考
えられる。

Nāgārjunakonda のアーヤカ石柱銘文に、長部・中部・
五[里尼]母を説示して暗誦する者 (Digṭa-Majjhima-paṭi-
sa-mānuka-osaka-vācaka) または長部・中部經典の受持者
(Digṭa-Majjhima-nigaya-dhara) による寄進が記録されて

いる。これは、かれらの伝持せる経蔵が、スリランカー上座のように Nikāya (Aṅgaya) の名称の下に分類されたこと、律蔵が『摩訶僧祇律』の如く五毘尼(五部)よりなる律蔵の略説; māṭṭā) を含んでいたことを推定せしめる。⁽⁴⁶⁾

⑩ Rājagṛika (Pāli: Rājagṛika, Rājagṛiya; 王山; Rājagṛi pa (bo?))

スリランカー上座部とバウヤの大衆部伝承のみが王山部の存在を知っている。Amarāvati の彫刻銘文等によれば、Rājagṛivāsika (王山の居住者) で制多山部に所属する者による寄進を銘刻している。これによって Amarāvati が王山 (Rājagṛi) の名によって称呼され、その僧伽が制多山部に所属したことを推定しうる。

⑪ Siddhārthika (Pāli: Siddhārtha, Siddhārthika; 義成; Bden (Don?) drug (grub?) pa)

スリランカー上座部とバウヤの大衆部伝承のみが義成部の存在を知っている。Amarāvati と Jaggyayapeta には Sidhārtha による多くの寄進が銘刻されている。⁽⁴⁷⁾ Burgess はこれらの名称のすべてを固有名詞とみなしているが、*Liders* 1202-4、1281 のそれを部派名と解するのに対して、

E. Lanotte は *Liders* 1281 のみを部派名として取り上げ、Dutt は Jaggyayapeta のそののみを部派名とみている。⁽⁴⁸⁾ ともかくも義成部 (Siddhārthika) は Siddhārtha を派祖とする部派であって、Jaggyayapeta を拠点としたものの如くである。

⑫ Andhaka (Pāli)

アムダカ派 (Andhaka ṅ Andhraka) はアムドラ地方に位置した部派を意味し、Buddhaghosa の *Kaṭhāvatthū-ajjhakathā* (五世紀) は、東山部・西山部・王山部・義成部の四派を、アムダカの名称の下に包括している。⁽⁴⁹⁾ *Nikāyasamgraha* (一四世紀) は、アムダカ派を含む九派を、第三結集後(仏滅二二五年)に分立したと記し、アムドラ地方の大衆系四派と区別している。

Buddhaghosa が *Kaṭhāvatthū-ajjhakathā* の中で、異執として批判している命題二一七の中で、アムダカ派およびそれに含まれる四派に関する命題は一一三に及び、全体の五二%を占めている。この事実からスリランカー上座部の論難する部派の中で、アムダカ四派の比重がいかに大きいかを推定しうる。

Nāgārjunakonda の制多堂銘文⁽⁵⁰⁾によれば、Māthariputra Śrī-Vīrapuruṣadatta 王の十四年に、諸規範師ならびにインドの各地を教化した Tāmbapanni (スリランカー) の長老たちの所領として、種々の建造物が各地に建立・寄進されたことを記している。これはスリランカーの出家者とアムドラ地方の大衆部との密接な関係を推定せしめる。

⑬ Apararājagṛika (Pāli; 西王山)

Dīpaṇṇisa のみがこの派の存在を伝える。しかし、以後のスリランカー伝承が、この派の代りに Vāṭṭiya を伝えるところから、これに比定することができよう。

⑭ Vāṭṭiya (Pāli; 金剛)

金剛派は五世紀以降のスリランカー上座部の伝承に知られる。金剛乘 (Vajra-yāna) に比定され、仏教タントリズムの源流とみられる。中インドの善無畏 (Subhakarasiṃha, 637-735) 南インドの金剛智 (Vajrabodhi, 671-741) スリランカーより不空 (Amoghavajra, 705-774) が、密教の經典・儀軌を中国に伝えている。

⑮ Uṭṭarapāthaka (Pāli; 北道)

北道派は *Kaṭhāvatthū-ajjhakathā* のみ伝えられる。居

住の場所についてはなんらの言及もない。しかし、この派の教理として四六を超える命題を挙げているのは、この派の存在を重視したからであろう。北道 (Uṭṭarapāthaka) は Thaneswar 以西の地域、インドスの全流域を表わす。Buddhaghosa は、有部・化地部・法蔵部・経量部・アムダカ派等と共通の命題を、この派に帰している。

⑯ Vettulaka, Vettulya (Pāli; 方広)

Kaṭhāvatthū-ajjhakathā と *Nikāyasamgraha* は、大空派 (Mahāsūnārāyādin) として知られる方広派について記している。スリランカー史伝によれば、⁽⁵¹⁾ Srināga I とかれの後継者の治世 (三世紀末—四世紀初) に Abhayagiri-vihāra の出家者に異教的傾向があったことを伝える。Vettulya は *Skt. vaipulya* (方広) に当り、Buddhaghosa がこの派に帰している命題は、大乘の教理に比定される。

⑰ Anyanahāsāṃghika (Pāli)

Nikāyasamgraha のみ伝えられている。

2. 上座系の部派

⑱ Sthavira (Pāli; Theravāda; 他俾羅、他韓羅、体毘履、

上座、上座弟子；Gnas brāṇ)；Shāvirya (他毗梨与；Gnas brāṇ pa) [A]

上座部を表わす名称として、Shāvirya (Theravāda) と Vibhajjavādin (Vibhajjavāda 分別説部) の二つが伝えられる。しかし、この名称は、それらを用いた年代と立場によって相違が認められる。まず、パーリ伝承によれば、仏滅後第二世紀の初、第二結集の決定に不満をもって分離した Mahāsaṅghika は mahāsaṅghe (大合誦) に因んで名づけられたが、正統派は分派以前の僧伽の名称 Theravāda を維持したとする。従って、大衆部は二分された部派の一つではなく、放逐された比丘のグループとみなされてゐる。

これに対して、北方仏教においては、バグヤの上座部伝承は「上座は聖者(aryā)の種であると説くので Shāvirya である」といい、プトンは「上座部は、上座の聖者の精神的相続者に属すると主張するので、この名称を与える」と説明する。これによって上座部を正統化しようとする意図は汲みとれるが、北方伝承は、根本の僧伽 (Saṅgha) を上座部と呼んでいない。例えば、有部の伝

承によれば、上座部は大衆部との諍論に敗退し、別住せしめられたと伝え、南北両伝における取扱ひ方に相違が指摘される。

⑨ Haimavata (Pāli: Hemavatta, Hemavata; 薩摩跋多、雪山、雪山住；Gaṇḍi ri pa)；Pūrvaśāvirya (先上座、本上座；Sṇon gnas brāṇ pa)；Mūla-shāvirya (Gnas brāṇ pa) sde pa rtsa ba)

雪山部の系譜については、諸伝によって、上座系に属するものと、大衆系に配するもの(バグヤの大衆部伝承、ヴィニターデーヴァ等)とがあるが、いずれも雪山部からさらに他の部派を分立せしめない点で一致している。最近の研究によれば、『毘尼母經』(No. 1463, A.D. 350-431)は雪山部所屬の律蔵と見るべきものの如くであるが、内容的に『四分律』(法蔵部)に似通う点が多く、また『僧祇律』の影響もみられる⁽⁵⁵⁾。この派の勢力は強力でなかったとみえ、スリランカーの史伝はこの派の所屬を伝えず、『舍利弗問經』がその存在を知らないばかりでなく、玄奘や義浄の記録にこの部派の名称が見出しえないのも、この派が早く消滅したこととの証明となろう。

真諦⁽⁵⁶⁾によれば、迦葉の後三百年に二部に分派した。上

座弟子部は唯だ経蔵を弘めて、律・論の二蔵を弘めなかった。しかし迦旃延子に至って毘曇(論蔵)を弘め諍論が起こった。この部(雪山部)は前の紛諍が除かれていないのを見て、ともに同処することを欲しないで、雪山に入って住した。所住の処に因って名づけたもので、この上座部を転じて雪山部という、と伝えている。さて、『異部宗輪論』が雪山部を本上座(『十八部論』先上座、『部執異論』上座弟子、『藏記』本上座)となし、バグヤの上座部伝承が根本上座と称するのも、上座部＝雪山部の關係を示唆するといえよう。

ソーナリー第二塔の水晶骨壺銘文⁽⁵⁷⁾によれば、Gotiputa Duddhisara, Kodiniputa Majjhima, Kotiputa Kāsapagotta の名が、またサーンチー第二塔の凍石骨壺銘文⁽⁵⁸⁾に Kāsapagotta, Majjhima の名が銘刻されているが、これらはスリランカー史伝に雪山地方の伝道師として伝えられている Kāsapagotta, Majjhima, Dura (Dundur) bhisara に当る。

部派の成立

⑩ Vāsiṣṭiputra (Pāli: Vajjiputtaka; 跋私弗底梨与、犢子、可住弟子；Gnas ma bu, Gnas mahi bu)

仏滅後三世紀、上座部より分立した最初の部派であ

り、Vāsiṣṭiputra が派祖であつたとみられる。『文殊師利問經』⁽⁵⁹⁾は律主の姓であるとなし、窺基⁽⁶⁰⁾はバラモンの姓であつたとする。真諦⁽⁶¹⁾によれば、舍利子・羅怛羅・可住子(犢子)の師弟關係を伝え、かれが『舍利弗阿毘曇論』を弘めたことを記している。スリランカー伝承によれば、Vajjiputtaka は Vesālī の第二結集において十事を提唱した Vajji (Skt. Viji) 族出身の比丘に比定される。これは、犢子部のサンスクリット語 Vāsiṣṭiputtaka より推定されるパーリ語の Vacchipputtaka と異なる。

⑪ Sammatya (Pāli: Sammiti, Sammitiya; 沙摩帝、弥離[底]、三弥底、三眉底与、正量弟子、正量、一切所貴；Kun gyaṇḍi bhar ba, Mani po bhar ba)；Avantaka; Kurukula 正量部は、カシシル伝承によれば、犢子部より分立した第三の部派であり、スリランカー伝承によれば、同じく第四の部派である。真諦⁽⁶²⁾によれば、『舍利弗阿毘曇論』を釈したと伝え、窺基⁽⁶³⁾は、権衡判定するを量となし、量は邪謬がないから正と言う。この部の教理は甚深の法義であつて、判定は邪がないから正量と称する。所立の

法によつて部の名を彰わす」と釈している。ハズヤの上座部伝承は、規範師 Sammata (Kun gyis bla ba) の規則を示す派であり、Avanti 城に住する派を Avantaka といい、Kurukula 山中に住する派を Kurukula と称する」と伝えている。

Sammata とおける正量部と犢子部の存在(四世紀)が知られる。⁽⁸²⁾ Dutt は *Kośa-vyākhyā* の Vāsiṣṭiya Arya-sammatīya とあるを指摘して、両派の密接な関係を推定する。初期の伝承は犢子部より正量部を流出せしめるが、後期の伝承は本末関係が逆になる。Mathura 出土の銘文によれば正量部の存在が確認される(カニシキカの治世)。

玄奘によれば、正量部は悪魔軍阻邏国 (Alīchakra)、劫比他国 (Kāpīṭha, Sīṃhāśya)、阿耶穆伐国 (Ayaṃukha, Oudh)、轉索迦国 (Viśoka, Oudh)、室羅伐悉底国 (Śrīvastī)、劫比羅伐率堵国 (Kāpīlavastu)、婆羅陀斯国 (Vāṭīnāś)、鹿野伽藍 (Mṛgadāva, Sarnath)、吠舍釐国 (Vaiśālī)、伊爛鉢伐多国 (Iranaparvata, Monghyr)、羯羅摩蘇伐剌那国 (Kārasuvartā)、摩臘婆国 (Mālava)、伐臘毘国 (Vālabhi, Kā-

thāwā)、阿難陀補羅国 (Anandapura)、信度国 (Sindh)、阿婆婆迦羅国 (Aṇḍumbhira, Indus 河口)、臂多勢羅国 (Pīṣṭīlā, Pattala)、阿婆婆茶国 (Avantā, Pattala の東北に、義淨によれば、西インド (Lāṭā, Sindh)、マガダ、東インド (Campā)、南海諸洲に知られた。『律二十二明了論』(大正 No. 1461)『三弥底部論』(大正 No. 1649)はこの派に属するものと思われる。

② Dharmottarika (Pāli: Dhammutarika; 達摩多梨、曇摩尉多利迦、法上、法勝; Chos mchog pa; Dharmottariya (Pāli: Dhammutariya; 達摩多梨与)

法上部は、仏滅後三世紀に犢子部より分立した最初の部派である。窺基は、法上とは法の上を名づける、と釈している。『文殊師利問経』は律主の名であるとなし、真諦は、犢子部の『舍利弗阿毘曇』を釈したと伝えている。ハズヤの上座部伝承は、規範師 Dharmottara (Chos mchog) を派祖となし、同正量部伝承は、Mahāgiriya より分派した二部 (Bhadrāyāniya と共に) 中の一派であるとす。法上部の存在は、西インドの Karle, Junnar の碑文に

よつて知られる。

③ Bhadrāyāniya (Pāli: Bhaddāyānika; Bhadrāyāniya (跋陀羅耶尼、跋陀羅与尼与、賢、賢乘、賢育; Bzau poḥi bu, Lam bzau pa, Bzau poḥi lam pa)

賢育部は、仏滅後三世紀に犢子部より分立した第二の部派である。窺基によれば、賢とは部主の名であり、育とは苗裔の義である。賢阿羅漢の苗裔であるので賢育という、と釈している。真諦は、『舍利弗阿毘曇論』を釈したと伝え、ハズヤの上座部伝承は Bhadrāyāna (Bzau poḥi lam pa) の弟子となし、同正量部伝承は、同派が Mahāgiriya より法上部と共に分立したことを伝えている。賢育部の存在は、西インドの Kāpīheri, Nāsik の碑文によつて確認される。ハローは Mahāgiri をこれらの地域に比定している。

部派の成立

④ Saṃnagarika (Pāli: Channagarika; 沙那利迦、六城; Gṛon khyer drug pa; Saṇḍagarika, Saṇḍagarika (Pāli: Chundagarika, Chandāgarika; 山施伽梨柯、密林住、密林山住、菴山)

仏滅後三世紀、カシミール伝承によれば犢子部より分

立した第四の部派、スリランカー伝承によれば、同じく第三の部派として伝えている。部派の名称に二種がある。Saṃnagarika は Sas (六) + nagara (都城) + ḥita の派生した語で、六城 (Gṛon khyer drug pa) を意味する。Saṇḍagarika は Saṇḍa (茨の茂み、密林) + giri (山) + ḥita より派生した語で、密林山を意味する。パーリ語の Chandagarika は chanda (欲望) + agara (家) + ḥita より派生した語であるが、Saṃnagarika > Channagarika と、Saṇḍagarika > Chandagarika > Channagarika との混用とみなすこともできる。

『文殊師利問経』は律主の居処であるとなし、窺基は、近山の林木蔭翳として繁密し、部主がここに住したので密林山と名づける、と記している。真諦によれば、『舍利弗阿毘曇論』を釈した、と伝えている。ハズヤの正量部伝承は、この派が Mahāgiriya より流出したとする説と、Saṃnatiya より分立したとする説を挙げてゐる。

⑤ Sarvāstivādin (Pāli: Sabbatthavāda, Sabbatthavādin; 薩婆多、薩婆阿私底婆捨、説一切有、一切語言; Thams cad yod par smra ba)

説一切有部は、スリランカ上座部と共に、もつとも隆盛をきわめた二大部派の一である。仏滅後三世紀、雪山部・犢子部に次いで上座部より分立した部派であるが、その起原については諸部派のあいだで、伝承に混乱が認められる。アショカ王の治世、パータリプトラにおける諍論に起因して分派したとみられる (Maudgalyāyana または Moggallāna による結集)。Sārvastivādin は、一切 (Sarva) が存在する (asti) 「三世実有、法体恒有」と主張するところに、部派の名称が与えられる。

説一切有部は、初め Mathura に堅固な地位を確保した。アショカ王の治世の長老は Upagupta であった。Mathura 有部の教団史 *Asokavaliya* は、かれをアショカ王の王師と伝えている。碑文によれば、前一世紀には大衆部と共に有力な部派であった。Mathura を拠点として、Gandhara-Kashmir へ伝道したのは Madhyantika であった。ギリシア王国と仏教教団の関係は *Milindapañña* にその一斑を見出しうるが、サカ族とクシャーナ王朝の教団に対する保護とその繁栄は、考古学的資料によって確認される。『十誦律』(大正 No. 1435, A.D. 404) は、この派

の律蔵であるが、論蔵の作成は顕著であった。『阿毘達磨集異門足論』『法蘊足論』『施設論』『識身足論』『界身足論』『品類足論』を基礎として、前二一世紀頃に、Kātyāyana が『阿毘曇八度論』(大正 No. 1543, A.D. 383; 『阿毘達磨發智論』大正 No. 1544) を集大成した。カニシヤカ王の治世には、この書に対する注釈書『阿毘曇毘婆沙論』(大正 No. 1546, A.D. 437; 『阿毘達磨大毘婆沙論』大正 No. 1545) が、カシミールにおいて Paśyva 等五百阿羅漢によって編纂された。これを第四結集という。Kalawan, Shah-jik-Dheri, Zeda, Kurram, Tor Dherai などの派の存在を確認している他に、中インドの Kāman, Sāleth-Māhoth, Samath にも存在したことが知られる。⁽⁸⁸⁾

玄奘は、阿耨尼国 (Agni, Arasānu) 屈支国 (Kucā) 跋祿迦国 (Bharuka, Agsu) 揭職国 (Guz) 揭盤陀国 (Kā-bhanda, Taś Kurgin) 烏鍬国 (Kaśgar) 答祿蘇伐那 (Tamasiwana, Kashmir) 秣底補羅国 (Maipura) 納縛提婆矩羅城 (Navadevala, Kanyakubja の東南) 摩揭陀国 (Magadha) 伊爛拏鉢伐多國、瞿折羅國 (Gurjara) 波斯国 (Persia) に有部の僧伽が存在したことを記している。

真諦によれば、上座部が経を重んじたのに対して、有部は毘曇を弘めた。

②⑥ Mūlasarvāstivādin (根本説一切有部; Gshi thams cad yod par smra ba, Gshi kun pa, Gshi kun yod par smra ba) バヴァの上座部と大衆部の伝承、ヴィニターデーヴァ等は根本説一切有部を伝えているが、それ以前の伝承には登場しない。また、玄奘が伝えないのに対して、義浄はこれを伝えている。他方、流出の部派について、ヴァスミトラの伝承は、有部より化地・法蔵・欽光(善蔵)・経量(説転)を、『舍利弗問經』は、弥沙塞(化地)・曇無德(法蔵)・蘇婆利師(善蔵)を、義浄は、根本有部より法護(法蔵)・化地・迦提卑(欽光)を記しており、伝承に一致が認められる。右の事実は、有部と根本有部とが本来は同一の部派であって、時代的に称呼が変わったことを推定せしめる。義浄によって漢訳された『根本説一切有部毘奈耶』(大正 Nos. 1442-1449) および蔵訳(大谷 Nos. 1030-1035) はこの派に属する。⁽⁸⁹⁾ 『大智度論』によれば、摩偷羅国 (Mathura) の毘尼は apādāna, jāṭaka を含み、罽賓国 (Kāśmīra) のそれは含まないと伝えている。これに従

えば、『十誦律』はカシミール有部の律、『根本有部毘奈耶』はマトウラー有部のそれであったと推定できよう。義浄によれば、根本有部は Magadha で、もつとも有力であり、北インドではほとんどの僧伽がこの派に属した。東インドでは他の三派と雑行され、南海諸洲でもこの派が優勢であったという。

②⑦ Hetuvādin (Pāli: Hetuvāda; 薩兜婆提、因論) 説因; Rgyu smra ba) ヲアスミトラおよびバヴァの上座部伝承は、この派を有部に比定するが、Buddhaghosa は有部と異なった命題をこの派に帰している。窺基によれば、上座弟子は本經教を弘めたが説因部が起って対法(論)を弘めた。すでに義理を閑い上座部を伏した。そのため説因部は旧住処に拠り、上座は雪山に移った、と伝えている。また、バヴァの上座部伝承によれば、ムルンタ山に住する有部を Murumaka と名づけている。

②⑧ Sautrāntika (經量; Mdo sde smra ba); Sūtrāntavādin (Pāli: Suttavāda; 修丹蘭多婆提、修多羅論、修妬路句、説經); Sūtravādiya (修多蘭婆提耶)

ヴァスミトラとバヴァの大衆部の伝承は、経量部を有部より流出せしめる（仏滅後四世紀初）のに対して、スリランカー上座部の伝承は説転部より、『舍利弗問經』は上座部より、『文殊師利問經』は迦葉比（欽光）部より分立した（仏滅後三世紀）と伝えている。

窺基によれば、この部派の師は經に依つて正量となして、律・対法に依らない。經を援拠として証となすので経量部と名づく、と伝えている。

②⑨ *Sanikāntika* (*Pāli*: *Sanikāntika*; 僧伽蘭多、僧伽蘭提迦、説度、説転); *Sanikāntivādin* (僧干闥底婆提; *Hpho bar smra ba*)

ヴァスミトラが説転部を経量部に比定するのに對して、『舍利弗問經』とバヴァの上座部伝承は、兩者を區別して、上座部より分立したと伝えている。『部執異論』で、経量部Ⅱ説転部は薛多羅 (*Uttara*) を師とするが、これはバヴァの上座部伝承が *Uttariya* (*Bla na pa*) に比定するの一致する。『異部宗輪論』が慶喜 (*Ananda*) をこの派の師と伝えるのは、経量の部派名の論拠を示すものであろう。

窺基は、この派が、種子があつて、唯一の種子が現在相續し轉じて後世に至ると説くので、説転と名づく、と釈している。

③⑩ *Vibhajyavādin* (*Pāli*: *Vibhajjavāda*; 分別説; *Ruam pur phye ste smra pa*)

Sūha-sūta には、仏陀は自らを *Vibhajjavāda* (分別論者) であるとして、一向論者から區別しているが、これは有部の『集異門足論』等に説く四記問の一部であつて、一向記に對する分別記に當る。スリランカーの史伝によれば、第三結集における異教徒の追放に當つて、「正等覺者は *Vibhajjavādin* (分別論者) である」という見解が判断の基準とされている。ここに、スリランカー上座部が *Vibhajjavāda* の名称を採用して、その正統性を主張した学説上の立場を指摘できる。

さて、分別説が流出する母体となる部派について、スリランカー上座部はこれを *Theravāda* に、バヴァの上座部伝承は有部に比定し、同じく大衆部伝承は根本の分派 (三派) 中の一派とみなしている。また、同じく正量部伝承は有部より分立したと伝えている。

次に分別説部よりの分派としては、大衆部と正量部の

伝承は *Mahāsāka*, *Dharmagupaka*, *Tinnasūya*, *Kaśyapa* を挙げるが、『舍利弗問經』、ヴァスミトラ、ヴィニターデーヴァの伝承は、これらの諸派を有部より直接に流出せしめる。従つて、この流出の形態は、分別説部を有部に比定する伝承と同一視しうる。要するに分別説部は、スリランカー上座部または有部に比定する伝承と、有部よりの分立とみる伝承に集約できる。そして、前者にあつては、スリランカー上座部および有部が、上座系の分派の系譜において、雪山部を除くすべての部派を、自派より流出せしめる点で一致していることは、両派のあいだに「分別説」をめぐる諍論が存在したことを推定せしめる。

③⑪ *Mahāsāka* (*Pāli*: *Mahimsāsaka*; 弥沙塞、弥憍捨婆柯、正地、化地、大不可棄; *Sa ston pa*)

化地部は、雪山・犢子・有部について、仏滅後三世紀に上座部 (分別説部Ⅱスリランカー上座部/説一切有部) より分立した部派である。すなわち、バヴァの大衆部と正量部の伝承、スリランカー上座部は、分別説部の名にお

いて有部の教理を否定し、化地部をそれより分流せしめるのに対して、『舍利弗問經』、ヴァスミトラ、ヴィニターデーヴァの伝承は、分別説部Ⅱ説一切有部より分立せしめている。

部派名の語原については、*mahāsāka* (土地を支配し、教誡し、懲罰するもの); *mahāsāka* (偉大な教誡者); *Pāli mahāsāka* *h Stv. mahāsāka* (水牛の食物); *mahāsēya* (大不可棄); *mahesvāsaka* (大弓手) 等、種々の説が示されている。⁽⁹⁵⁾

窺基によれば、この部派の祖師は、本国王であつて、王が統攝する国界を地といい、地上の人庶を化するの

ため、本に従つて化地部と名づく、と説明している。『五分律』(大正 No. 1421, a.d. 423-424) は化地部の律藏であり、この派の存在は *Nāgārjunakondā* (三世紀末), *Kṛta* (五世紀末) の碑文によつて確証される。⁽⁹⁶⁾

③⑫ *Dharmagupaka* (*Pāli*: *Dharmagupaka*; 曇無德、達摩及多、法護、法蔵; *Chos srub, Chos sbas pa*)

法蔵 (法護) 部は、仏滅三世紀に化地部より分立した

部派とみなされる。但し、『舍利弗問經』とヴィニータデーヴァは有部より、バウヤの正量部傳承は分別説部より、これを流出せしめる。

真諦によれば、法護は人名で目連の弟子であった。目連の滅後、法護は習學して五藏(經・律・論・咒・菩薩)とした。化地部は未だこれを制立せず、化地部の中にこの五藏と同じくする者もあつたので分立した。法護部と名づくるのは、法の所護となすからである、と釈している。『四分律』(大正No. 1428, A.D. 408)はこの派の律藏であり、Mahurāの碑文によつて、この派の存在(二世紀)を確証する。また Dharmagupta の寄進を銘刻する碑銘が Kanheri, Sonari, Bhilsa, Bhārtut, Kolhapur に知られている。

③ Kāśyapiya (Pāli: Kassapika, Kassapiya; 迦葉維、迦葉惟、柯尸悲与、迦葉比、飲光、飲光弟子; Hod stuns pa) 飲光部は、仏滅後三世紀に説一切有部(二分別説部)より分立した部派である。窺基によれば、飲光とはバラモンの姓(迦葉波 Kāśyapa)である。上古に仙あつて金光を有し、余光は側に至つた。余光を飲蔽するので飲光とい

う。この部の教主は彼の苗族であるから飲光と名づけた、と伝えている。バウヤの上座部傳承は、軌範師 Kāyapa を祖師としたので Kāśyapiya と名づける、という。この派の存在は、西北インドの Tukhāṭi-Bāh, Taxila, Baddi, Pāṭhā-Dheri (多聞部と共に)、Sauri-Bahlol および中インドの Pabhosa に知られる。『解脱戒經』(大正No. 1460)はこの派の律藏に属する。

④ Suvāśaka (蘇婆利師、優梨沙、蘇跋梨沙柯、善歲、Lo bzai bo, Char bzais hbebs pa) 『舍利弗問經』は、善歲部が有部より法藏部に次いで分立したことを伝え、飲光部と区別している。これに對して、ヴァスミトラ、バウヤの上座部傳承はこれを飲光部に比定する。窺基は、飲光部の祖師は少歳より性は賢く徳があつたので善歲と名づけた。派祖の姓によつて飲光部といい、名によつて善歲部と称する、と釈している。バウヤの上座部傳承は、よく讀えらるる所縁の法雨を降らすので Suvāśaka と名づけるという。この派の存在は西インドの Karle (二世紀)に知られる。

⑤ Tāmraśāṭīya (紅衣; Gos dmar pa)

バウヤの大衆部と正量部の傳承は、分別説部より流出する四派中の一に数えている。

⑥ Theravādin (Pāli; Skt. Shavira); Mahāvihāravāsin [B] 現存南方仏教の傳承は、スリランカー上座部の大寺派 (Mahāvihāravāsin) に属する。スリランカー史によれば、アショーカ王は王子時代に Avanti 国の統治を委任されたが、同国の都 Ujjeni へ行く途中、Vedisa でその地の娘 Devi との間に Mahinda と Samghamita をえた。のちにその二人はアショーカの師 Moggaliputta Tissa の助言によつて出家したが、第三結集の後、Moggaliputta は Mahinda をスリランカーへ伝道師として派遣した。かれはまず母の住む Vedisa へ向い、この地の僧院に一か月滞在したという。これはスリランカー上座部がこの地からの伝播とみる一つの証跡となっている。因みに Moggaliputta の存在は、Andher と Satci の骨壺銘文より確証されている。かれらの存在は、スリランカーの他に Nāgārijanakonda の碑文(三世紀)によつて知られる。ビルマ、カンボジア、タイ等の南方仏教はこの系統に属する。この派の三藏は完全な形で伝えられている。Vīnaya

Piṭaka へ Sutta-vibhaṅga, Khuddaka, Parivāsa へ Sutta Piṭaka へ Dīgha Nikāya, Majjhima N., Saṃyutta N., Anguttara N., Khuddaka Nikāya へ Abhidhamma Piṭaka へ Dhammacakkā, Vibhaṅga, Pugolopaniṭti, Kathāvatthu, Dhātukathā, Yamaka, Paṭṭhana を編纂した。

⑦ Dhammaruci; Abhayagiriika

Mahāvamsa によれば、Lanka-dīpa (スリランカー)における上座部(大寺派)より二派の分立を伝える。Abhayagiri に住する者を Abhayagiriika (無畏山寺派)或は Dhammaruci (法喜部)といふ。

⑧ Sāgalīya; Javanīya; Dakṣiṇavāhara.

Abhayagiriika より分立して Dakṣiṇavāhara に住する者は、Mahāvihāra の結界に接した Joti と名づくる苑中に Javanavāhara を創設した。かれらを Javanīya (祇多林寺派)または Dakṣiṇavāhara (南山寺派)と名づけ、Sāgalīya (海部)といふ。

註

(一) 拙著『改訂増補・初期仏教教団史の研究』四一四—四四九頁をみよ。

(2) 異部宗輪論4本に現われる部派名の対照

サンストリット名	十八部論	部派異論	異部宗輪論	チベット訳	部派異論付記
Mahāsaṅghika	摩訶僧祇	大衆	大衆	Dge lhan phal chen	摩訶僧祇
Ekavyāvahārika	一說	一說	一說	Tha shad geig pa	獨持毗婆沙
Lohitaravādin	出世間說	出世說	出世說	ljiig ren-phas smra	廣俱多羅婆沙
Kauṭukika	窟	窟	窟	Bya gag ris	高俱底柯
Bahuvrīya	多聞	多聞	多聞	Man du thos pa	婆娑阿私婆沙
Pratyārvādin	施設(論)	分別說	分別說	Blags par smra ba	波羅若底婆沙
Caityaśāila	阿羅漢說	支提山	支提山	Medod rten pa	支底寺世羅
Aparsāśila	阿婆羅	西山	西山	Nub kyī ri bo	
Purvaśāila	前多羅施羅	北山	北山	Byan gi ri bo	前多羅世羅
Śtāvira (yāda)	他特羅	上座弟子	上座	Gnas brtan	他特羅
Pitvashavira	先上座	上座弟子	上座	Shon gnas brtan pa	他特羅
or Hainavata	雪山	雪山住	雪山	or Gans ri ba	薩婆阿私婆沙
Sarvāstivāda	薩婆多	說一切有	說一切有	Thams end yod par smra ba	薩婆阿私婆沙
or Itivādin	因論	可住弟子	可住弟子	or Rgyu smra ba	薩婆阿私婆沙
Vāśīputrīya	達摩多梨	法上	法上	Gnas ma bu	薩婆阿私婆沙
Diarmottīya	跋陀羅耶尼	賢乘	賢乘	Chos mchog pa	跋陀羅耶尼
Biadrāyāniya	跋陀羅耶尼	賢乘	賢乘	Bzani pojū bu	跋陀羅耶尼
Sannāyīya	三多梨	正量	正量	Kun gyis bkur pa	三多梨
Sanagarika	六	密林住	密林住	Gron khyer drug pa	山推伽梨柯
or Sandagrikā	密沙(著)	密林住	密林住	Sa ston pa	密沙(著)
Mahāsāka	無德	正法	正法	Chos ston	達摩多
Dharmaguplaka	迦葉推	飲光弟子	飲光弟子	lrod srnis pa	何尸悲乎
Kāśyāpiya	優梨沙	說經	說經	Lo bzani bo	蘇跋梨沙柯
or Sauvaśaka	修多羅論	說經	說經	Mdo sde smra ba	修多羅多婆沙
Sautrāntika	僧伽蘭多	說經	說經	ljipto bar smra ba	僧伽蘭多婆沙
or Saṃkrāntivādin					

(3) A. Bareau (*Les sectes bouddhiques du Petit Véhicule*, Saigon 1955, p. 17) は廣多羅(Caitra)・末多利(Matariya)・E. Lamotte (*Histoire du bouddhisme indien*, Louvain 1958, p. 588) は廣多羅(Caitra = Caitia)・末多利(Matara = Ura-tasāla) の比定關係を推定している。しか

く B. Karlgren: *Grammata Serica Recens*, Stockholm 1972 によれば、藤堂明保『漢子語源辞典』によれば、廣多羅 = *siē-tā-lia* < *Cetira < cetia < Caitya (Sk. Caitya) または < *Cetāla < Cetā + āla or ilia (Sk. Caitya) : 末多利 = *ma-tā-lī* < m-Utari [ya] を推定している。したがって『舍利弗問經』の「摩訶提婆部・廣多羅部・末多利部」の原文は「Mahādevaka- *Cetira-m-Utariya or Mahādevaka- *Cetāla-m-Utariya (m 是 Sandhi consonant) であつたと推定される。拙稿「ペンダカ派の形成と展開(その一)——制多山部の成立——」(『壬生博士頌壽記念論文集』) によれば、

(4) Bareau (*op. cit.*, p. 21) は伝承の相關性に「左のように推定する。舍利弗問經(A.D. 300c.)十八部論(A.D. 350 c.)

部執異論(A.D. 400 c.)

文殊師利問經(A.D. 450 c.) によつて上座部傳承(A.D. 450 c.)

- (5) 拙著『前掲書』四五〇—五〇二頁をみよ。
(6) 拙著『前掲書』二二六—二二八、二七一—二七九頁をみよ。

- (7) S. Konow: *Kharoshthi Inscriptions, Corpus Inscriptionum Indicarum*, Vol. III. pt. 1, Calcutta 1929 [Konow], p. 48; Lüders: *Mahurā Inscription*, Göttingen 1961, p. 144, §79; p. 121, §86; p. 165, §125; p. 170f, §134, p. 191f, §157; *El. XXX*, p. 181; Sharma: *Excavation at Kausāmbī, A.B.I.A.*, XVI, p. XLIV, pl. Vb); Lüders: *List of Brāhmī Inscriptions, El. X, Appendix [Lüders] 1105, 1106.*

- (8) Dutt: *Notes on the Nāgārjunakonda Inscriptions, IHQ vii (1931), pp. 647 f.* は「漢訳律蔵の標題の中で、摩訶僧祇(Mahāsaṅghika)がこつこつ僧祇と省略されるのに注目して、釋尊の ācariyānām Ayira-haṅghānam 及び Ayira-haṅgha or Haṅgha (Sangha) といふ部派に属する教師」と理解している。従つて Burgess が固有名詞となつてゐる Haṅghī 及び Ārya-saṅgha (Mahāsaṅgha) は決定である。 *El. XX*, pp. 17, 20; Lüders 1274, 1281, 1240; *ASSI*, p. 90; Lüders 1272, 1262, 1210.

- (9) 『大唐西域記』大正五一・九四〇上、八八八上、九三〇上。

- (10) 『南海寄歸内法伝』大正五四・二〇五中。

- (11) Vināyadeva: *Saṃyukhebhāṣanacūche nīṣyabhebhāṣa-saṃsaṅgraha*, 大谷 No. 5641; 東北 No. 4140 (根本有部の傳承)

- (12) 『部執異論疏』(仏教大系「三論玄義」三七—二二頁)。「異部宗輪論述記」(大日本統蔵八三・三「二二八上」)に「此の部の説は世出世の法皆異体なり、但た仮名のみに有り、名は即ち是れ説なり。意の謂く、諸法唯一の仮名にして体の得べきものなし。即ち本旨に乖く。所以に別に分ちて一説部と名く」とあるは同義。

- (13) 『文殊師利問經』No. 468 [A.D. 518 僧伽婆羅譯]大正一四・五〇一中。

- (14) 『異部宗輪論述記』前掲書「二二八右」。

- (15) 同右。

- (16) Bareau: *op. cit.*, p. 75.

- (17) 『大唐西域記』大正五一・八七三中。

- (18) *Tīrānāliha de doctrinae buddhicae in India propagatione*, ed. Schiefner, Petropoli 1868, p. 274.

- (19) *Mahāvastu*, ed. Senart, I. p. 2, III. p. 461.

- (20) N. Dutt: *Early Monastic Buddhism*, Vol. II. Calcutta 1945, p. 51.

- (21) 『部執異論疏』前掲書「三二二頁」。

- (22) 『異部宗輪論述記』前掲書「二二八右」。

- (23) 『部執異論疏』前掲書「三八〇頁。『述記』に引用する

- (24) 『前掲書 二一八左a』。
- (25) 『成実論』はこれから出たものといえるが、これは本書が理長為宗的に各派に亘ったことを示すものである。宇井伯壽「成実論解題」(国訳一切経論集部三「八頁」)。
- (26) Konow, p. 122; *Et. XX*, pp. 24, 62; cf. Bareau: *op. cit.*, p. 82.
- (27) 『部執異論疏』前掲書 三八二—三八三頁。
- (28) 『異部宗輪論述記』前掲書 二一八左a—b。
- (29) *Liders* 1248.
- (30) *Liders* 1223, 1263.
- (31) *Liders* 1250.
- (32) *Liders* 1230, 1271. Burgess 氏 *Mahāvamsa* 云、諸の *ASST*, pl. LX, 49 には *va* といふ半体符号を指摘する。
- (33) *Liders* 1130, 1171.
- (34) *Et. II*, p. 328 (VII), *Liders* 1336.
- (35) 拙稿「アヘンカ派の形成と展開(その一)——制多山部の成立——」(『壬生博士頌寿記念論集』)、「アヘンカ派の形成と展開(その二)——東山部と西山部の成立過程——」(『中村瑞隆博士古稀記念論集』)を参照。
- (36) *Et. XXIV*, pp. 256ff.; *ASJR* 1923-24, p. 93.
- (37) *Et. XX*, p. 22.
- (38) 註(3)を参照。
- (39) *Et. XX*, pp. 17, 91, 21, 41; *XXI*, pp. 64-66; *XXXIV*, p. 210; *XXXV*, pp. 7f.; *XXXVII*, p. 4; *IHQ* 1931, p. 647.
- (40) *Et. XX*, pp. 10f.
- (41) *Nikāyaśāstra* 大正五・九三〇上。
- (42) *Et. XXVII*, p. 4.
- (43) *IHQ* 1942, pp. 60-63.
- (44) *IHQ* 1931, p. 641.
- (45) Dutt: *Early Monastic Buddhism*, II, pp. 55-56.
- (46) *Liders* 1250; *ASST*, p. 104; *Liders* 1225.
- (47) *Liders* 1202-4, 1235, 1247, 1281; *ASST*, p. 103.
- (48) E. Lamotte: *op. cit.*, p. 581.
- (49) *Kāṭhāvatthi-aṭṭhakathā*, pp. 2-3, 5.
- (50) *Nikāyaśāstra*, pp. 6-9.
- (51) *Andhaka* 72, *Pubbaseya* 30, *Aparaseya* 5, *Rājagiriya* 10, *Siddhantika* 8.
- (52) *Et. XX*, p. 22.
- (53) *Dīpaṇṇasū*, xxii, 45; *Mahāvamsa*, xxxvi, 46.
- (54) 金倉圓照「毘尼母経と雪山部」日本仏教学会年報二五・二一九—二二二頁。
- (55) 平川彰「律蔵の研究」二六三—四四頁。
- (56) 『部執異論疏』前掲書 三九五頁。

- (57) *Liders* 156-158.
- (58) *Liders* 655, 656.
- (59) 『文殊師利問経』大正一四・五〇一中。
- (60) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二〇右a。
- (61) 『部執異論疏』前掲書 四〇一頁。
- (62) R. Pischel: *Grammatik der Prakrit-Sprachen* §327; N. Dutt: *Early Monastic Buddhism*, II, p. 174.
- (63) 『部執異論疏』前掲書 四〇三頁。
- (64) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二〇右a—二二〇左a。
- (65) *Nikāyaśāstra* 大正五・九三〇上。
- (66) *Liders* 923.
- (67) N. Dutt: *op. cit.*, II, p. 174.
- (68) *Kaśyapaśāstra*, IX, 3.
- (69) *Et. XIX*, p. 67, No. 5.
- (70) 大正五・八九二下、八九三上、八九七上、八九八下、八九九上、九〇〇下、九〇五中、九二六上、九二八上、九三五下、九三六中、九三六下、九三七上、九三七下、九三八中。
- (71) 『南海寄帰内法伝』大正五四・二〇五中。
- (72) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二〇右b。
- (73) 『文殊師利問経』大正一四・五〇一中。
- (74) 『部執異論疏』前掲書 四〇三頁。
- (75) *Nikāyaśāstra* 大正五・九三〇上。
- (76) *ibid.*, 183a8.
- (77) *Liders* 1094, 1095, 1125.
- (78) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二〇右b。
- (79) *Liders* 987, 1018, 1123, 1124.
- (80) Bareau: *op. cit.*, p. 128.
- (81) 『文殊師利問経』大正一四・五〇一中。
- (82) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二〇左a。
- (83) 『部執異論疏』前掲書 四〇三頁。
- (84) *Nikāyaśāstra* 大正五・九三〇上。
- (85) Konow, p. 48; *Liders* 125c, 1394.
- (86) *JRAS* 1932, pp. 949 ff.; Konow, pp. 137, 145, 155, 176; *Liders* 12, 918-919, 929a-292b.
- (87) 『大唐西域記』大正五・八七〇上、八七三上、九四二中、下、八八九中、八九一上、八九六上、九二五中、九二六上、九三六下、九三八上。
- (88) 岩本裕「Sarvastivādin 及 Mūlasarvastivādin」(『十誦博士古稀記念論文集』) 拙著「前掲書」四四七—四四九頁を参照。
- (89) 『大智度論』大正二五・七五六下。
- (90) 『南海寄帰内法伝』大正五四・二〇五中。
- (91) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二〇右a。
- (92) *Nikāyaśāstra* 大正五・九三〇上。
- (93) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二二右a。
- (94) *Nikāyaśāstra* 大正五・九三〇上。
- (95) 『異部宗輪論述記』前掲書 二二二右a。

